





吉田一馬家の戸印
阿波國文庫

一馬の力

馬と

一馬

一馬

一馬

一馬

一馬

一馬

一馬

池田家
一馬

よきことありては是れも亦
同く取極人よしとてさるる
よ

しるるの人多くは是れも亦
包し是れも亦極人のよしと
あはれは是れも亦同く取極
てありては是れも亦同く
よきことありては是れも亦
あはれは是れも亦同く取極
りありては是れも亦同く

よきことありては是れも亦

極人よしとてさるる

同く取極人よしとてさるる

よきことありては是れも亦

同く取極人よしとてさるる

よきことありては是れも亦

同く取極人よしとてさるる

よきことありては是れも亦

同く取極人よしとてさるる

よきことありては是れも亦

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the right page of the spread. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, written on the left page of the spread. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style with many loops and flourishes. It appears to be a personal communication or a formal document. The ink is dark and the paper is aged and slightly yellowed.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style with many loops and flourishes. It appears to be a personal communication or a formal document. The ink is dark and the paper is aged and slightly yellowed.

Handwritten text in cursive script, likely representing musical notation or a specific dialect. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in cursive script, likely representing musical notation or a specific dialect. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines, mirroring the style of the reverse side.

世にわたりて くらまのたしむ

早き 今れ小方れらるるのち

又和樂作馬糸の中少もいふ

あり

坂とくろ輪 後漢の皇甫嵩傳問

忠曰逆坂走丸逆風縱棹豈易

哉

来ッる人 来経と欄柯作と号も

其申よ小ッ捨て大ッぬしそめさ

まことかたすそ 此のすそ同さ

くあまのいなりまのまのの

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

まのいれすそ ぬられすそ

てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も
てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も
てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も

待人の 郭侯トウコウ不來謝令推トク不トク

事としり地よりあつておれ
少くもれ推し、書よかり
事としり地よりあつておれ
少くもれ推し、書よかり

てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も
てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も
てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も
てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も
てはかきとせよと書し一平の心も
るる一平の心も

くんははれのゆへに私^{ナシ}とてまじ
常はふらちとまじりもくしの行帳
孔帳とふれにまじり

ゆき 東の巻にひかるとまじ

アアヤ 海は沐のまじり

沐浴^{シム}

すうりつ 奥はくまのまじり

しうぢのつらひ(ちか)まじり

はなはしなまじりまじり

くま^{シム}まじりまじり

うはまあつらぢの寝むる人の

ひま^{シム}

市公ふまのまじり

まじり

市公ふまのまじり

くま^{シム}のまじり

まじりまじりまじり

まじりまじりまじり

まじりまじりまじり

まじりまじりまじり

しすしりりてしうのりたさ
我らと人の心さうさうとさ
すれらりしりんちんちん
つらうへく又まう法師
多のしりりそとせしん
あうとせしんとせしん
ふあさう物とあさう
ととへん

くく人 愚闇人へ 莊子小知不
及大知 又曰大知間小知間

注 間、間、言、智量、大小、不同也
賈、生、服、身、賤、小、知、自、私、若、賤、彼、
貴、我

万の道れへ 百工へ 尚書五子
之欲予視天下愚丈夫愚婦一能
勝予

文字は法師暗澄の経師 止觀第
五暗證禪師誦文法師とあつて
あり文字法師の教相とあらうて
坐禪とあつて暗證の経師と

或人る我るこひをよきなりけり
種の人こひをよきなりけり
日よのよきなりけり
おののよきなりけり
我れ男に人あはれはよきなり
まゝのよきなりけり
くりる我のよきなりけり
よのよきなりけり
おのよきなりけり
る我のよきなりけり

る我のよき 通基云くは敵常の味あ

よあつて今ひの瓶八氣らり
のあつて今ひの瓶八氣らり

東よりすつれは
舟の対海氏のつれは
の敵と侍とつれは
中にお国結縁よつれは
つれは
考はつれは
おのつれは
相国おのつれは

あつれらうぞんぬの悪鬼とれ
そあつれらうぞんぬの悪鬼とれ
あつれらうぞんぬの悪鬼とれ

東大寺の神興と口常（あり）時をる

あつれらうぞんぬ

東大寺の神興

の敵 こと此の久我の久我

あつれらうぞんぬ 隠声有り河海

又唱道前可警蹕みるさるる

（あ言よ）訂呼の二言のさるる

とつ

あつれらうぞんぬ 定實云く久我の

庶流

警蹕 前漢列傳十七梁孝王

得賜天子旌旗從千五百騎出

稱警入言蹕 注師古曰警者戒

肅也蹕止行人也言出入者互文

耳出亦有蹕 漢儀注皇帝輦

動左右侍帷幄者稱警出殿則傳

蹕止久清道也 韻會蹕本作蹕

法皇の御事
大御人の御事
すゝめりし御事

山崎抄
とわりの御事
とわりの御事

西宮の院
西宮の院
西宮の院

明るれ作

法寺の信
定額
とわりの御事
とわりの御事
とわりの御事

定額
續日本記
文武天皇
大實元

年八月皇親奉滿者
不論宮不
省入賜祿之類
弘仁文曰
古改官
府禁の京畿
内諸國
私作
伽藍事
右等
勅定額
諸寺其
類有
限私
當作
先既
立例
此
本所司
寬縱
曾不
糾察
如經
年代
云比
不寺
十八
史畧
才七
元以
耶律
楚拔
言始
定天
下賦
稅
上田
每畝
稅三
升中
田二
升半
下
田二
升水
田一
畝五
升高
稅三
十分

之一丑戸出絲一介以給諸王功
長湯沐之賜塩每銀一兩四十介
永為定額ふりのりのり
と定款とのりのり唐志出り

女孺ニ禁秘抄云云式不着衣衣只小袖
唐衣唐以以左道道染巾巾調調交交能能年年
と下格子奉仕仕乞乞敷人等等如在在不
苗苗取取也也心心下下中中掃掃除除指指油油役役女孺孺
下下知知

延長式 五十卷あり延長年中古大

臣忠平勅ととととと博博士士ととととあり
りてり撰撰と

揚名介ふとととと揚名目とととの
とありと改改事事要要畧畧ふふあり

名介 源氏之とととと

揚名目 受領と法法國國八八守守介介

椽目のととととありあり織織源源ふふととあり

改事要畧 百三十卷ありこ惟惟宗宗允允亮亮

撰記ス公公務務交交替替白白紀紀彈彈雜雜事事至至要要臨臨
時時雜雜事事等等

と例とあり十月法社の御事と
例とあり他社ありある例と

神事目 貞治の比藤沢山東門

由阿々万葉集乃注して詞林

宋葉抄と名つゝその才云一天

下乃神事目と名あり國一

神を月と神目と名あり我朝

の法神と名ありありなる人

やその神名ありありなる人

の対小堂のつゝありありなる

舟波とありありなる人

法神のありありなる人

ありありなる人

は神を人社と名ありありなる

ら多し神事依人の神と名あり

傳説の神と名ありありなる人

壽人の神と名ありありなる人

こりありありなる人

しありありなる人

と家廟の神と名ありありなる人

法社八日寺

拾芥云松尾

寛和元年十月十四日

北第

寛弘元年十月廿一日

日吉

延久三年十月廿九日

物物乃下は鞆ころ物法とへくえく
ふきろくろくくくくの中徳人あき世
ら中のさくくくく又糸の玉糸
よゆれくくくく鞆馬よゆ糸の明
糸くくくも鞆くくくくくくく糸
着背長の負くくくく糸とくの家小
くくくくくくくくくくくくくく
のら今れ世にへ封成つくくくくく

みくろ

鞆

天のくくくく

鞆

岩室一名云又

山谷詩倒鞆

収蓮菰くくくくくくくくくく

穴く矢ッ入くくくくく

日本紀

糸代上、天照太神背負千矢之鞆

五百箭之鞆くく矢菴く今れ平胡

録ノ鞆

中のさくくくく

時氣疫病の

みくろ

五條八天糸

スチキコ 名ノ糸ノ高

皇産灵ミムスヒノミコト乃子コノミコ久已コトシヨク貴ウツクシト天下

と傳ツタヘマシテ疾痛ヤマトと治ナラシメルコトト云

云々日本紀中一ニヨリ云々云々

云々云々五條八天糸ト云

云々木餅キツク云々云々

云々出デリノ首途ウチシイハシ

すハハシトス云々云々

轉馬カトノシヤ云々ノ糸

看督長カトノシヤ 敏原トモノ云々ノ遠使

此云使歷本
取乃鞆負歷也

當使補ス看督長六十六人此為遠諸

國也

和人ワタリト云々ト云々ト云々ト

云々ト云々ト云々ト云々ト

云々ト云々ト云々ト云々ト

云々

和人 罪ツトセ云々

和名云唐令云答ニミト 音知和名ニ
毛皮

大頭二分小頭一分又云杖 音伎
和名

都志 皆削ヒキ去節スツ目長三尺五寸許

考

玉篇：考、苦老切、打

以穀山の大帥の記法と云の
へ意惠傷正書りめめききりりなりなり記法
文のりりなりなり法法書書ののりりなりなり
ののりりなりなり記法と云ののりりなりなり
ののりりなりなり記法と云ののりりなりなり
布布ののりりなりなり記法と云ののりりなりなり
ととなりなりなりなりなりなり

大帥勸法の記法

元亨釋書の釋良源

始木津氏の近川の淺井郡人也延在

十二年九月二日生年十二上上穀山

師ニトシツコフ事理山延且六年年禮レ專レ意登壇

受戒ス且レ康保三年八月補天台座

主領ス山務者二十年年天元四年為大

信心兼法務ノ聽聳車ノ永觀二年

正月三日唱彌陀而滅年七十四

賜シ溢意惠ト約廷り意惠トここりり

備号トしこりり山門ののりりなりなり意惠

大帥と云りり傳散以法意意意意院

大帥のりり

法曹 明法家といふは曹は家

ししし 律令ししししししし

ししししししし 法曹至要抄といふ

ととあり 減取

ましししししし せしししししし

ししししししし せしししししし

のふふふふふふしししししし

とせんその思由の徹しししし

れきししししししししししし

とふししししししししししし

かりししししししししししし

きししししししししししし

忌の起しし 後成恩寺殿日本

紀纂疏云水火は天生之物無分

染淨而補事忌火何也曰火雖是

淨因物而穢故不食炊爨之物而

已

法大寺右大臣及捨此遣使の別ある

時中門して使廳の評定ありしん

なりしん 官人 章兼アキカミ 半アキカミ

鹿乃ららんかて大印の乃のらぬゆ
のらぬにのらりてまれららるる
外そらりたりあはれは美たりとて
しと陸陽物のもとへはらりて
しと音りたる成文の相國さるる
牛よふあさしあはれりての
りしとん起弱の官人ぬぬおは
りぬまよとらるるまやとらるる
しとまはらるるしとらるる
多ふまよのめらるるふらりあはれ
てあま

りらりきりとらんちや
しぬらりとらるるら
りしとらり

使履 くんのりし履 云々

官人 あまらる

人理 くんのりし履

とぬゆ

ゆきしらみ

本草綱目 韃草

一名牛轉草即牛食而後出者

俗曰回嚙 和名曰爾雅集云歎
吞藟啞及出而嚙牛曰齧 郊牛
れ口やうんまうとくくのみ又その角
げの鬣入らぬらとくくまうてわ
あめらふり善秋傳よんえとくくは
とてとろ半とくく陰陽師つら
（あまのり）

父の相國 云考の父を及人自父基し
是のわこいりくへらのめくさん性理字義
云大抵妖由人興凡諸般鬼神之狂

皆由久心興之人以為靈則靈不
以為靈則不與人以為怪則怪不
為怪則不恠伊川尊人官廨多
妖或報曰鬼擊鼓其母曰把槌与
之或報曰鬼打扇其母曰俺執故
耳後遂無妖只是主者不為之勤
便自無了 細觀左氏取謂妖由人
興一語說得極出明道石佛放光之
事亦然

狂弱の官人 章兼とらと 韻會狂

鳥光切跛曲脰詳式作脰亦作脰荀
子賤之如脰注廢疾之人 子之如脰

名一 千金方

黃帝雜忌咒曰見脰不脰其脰自

壞

鬼山後之てらまんとて地とのれ
くらよらんまのうくらまのね
ちりちりまのね 塚まくらりこはあ
秋まらりとてのてらまのよのれ

くまらんまのねちりちりまのね
くらよらんまのうくらまのね
ちりちりまのね 塚まくらりこはあ
秋まらりとてのてらまのよのれ
くらよらんまのうくらまのね
ちりちりまのね 塚まくらりこはあ
秋まらりとてのてらまのよのれ
くらよらんまのうくらまのね
ちりちりまのね 塚まくらりこはあ
秋まらりとてのてらまのよのれ

鬼の友

うきうき

舊の字くさくさ

あやう

ひあし

新傳大ら基云く

まぢしあひんま

あやももくじく人者の因あま

うきうき鬼の友うきうき

鬼神

うきうき

俗は鬼

衆は横道うきうきうきうき

神の聰明正出而壹者く蛇のく

うきうきうきうきうきうき

とありうきうきうき

神のくきうきうきうき

うきうきうきうきうき

うきうきうきうきうき

神のくきうきうきうき

弘舞信正うきうきうき

うきうきうきうきうき

うきうきうきうきうき

うきうきうきうきうき

性うんくうしん寛ふりてふらぬ
らさうすいふ怒えふさうしん争
らうしん争

つらひりて 威ありて

秦れ治會れ教く三略、屎者虚也

剛老賊く又曰威多則身頽

敗ありて 阿房の昇鎬玉石金

塊珠磔と子羽一炬火驪山三月江く

やありて 莊子曰孔子再遊於魯

窮於齊伐樹於宋困於陳蔡不容

身於天下

孔子と時たあふん 傷於返不行宋

存活於海

徳ありて 返虚

顔回名事ありて 湯沈、顔回不幸

經命下而死

名ありて 史記、韓非傳、衛

弥子瑕、名人車よのう桃れ餘と名

多しん電を甚てひ二事大なる罪

とて殊やとる又揚き死國忠く教

と果して馬鹿に鬼とらるる

奴もさうりとして 彭蠡梁冀 柳

云權 張之定りやりののしを

くまら

人の志とと 凡士卒つと愛して

てたてたりみことあつた

甚多し朋友のつらしみ

物と多のしん 張平陳餘

預て交としん 息を欲

うりて張平韓信のりく陳餘

教と又朋友は迄始終とらるる

からるる 朱穆段交論り他り

孝標廣段交湯と他

もたうとたへるるに非らうとた

はこち連続とらるる

是あつたももるる

山谷作東坡

賢曰其愛之也引之上西掖

坡是亦一東坡非亦一東坡其惡

之也投之於鞬之波是亦一東

坡非亦一東坡也

蘇子曰りきれいさくん前たきとれい
うさくん 孟子曰若逢其源とい

なり

てくは対ひ 莊子夫道篇輪扁曰徐

則耳而不固疾則苦而不入不徐

不疾得之午而應於心

一毛と換やと 孟子曰楊子曰若我

換一毛而利天下不為く 列子曰揚

朱曰古之人換一毫利天下不與也

人、不換一毫天下治矣

人の天地の盡く 問書、秦誓、惟天地

万物、父母、惟人、万物之靈、蔡氏傳

云、天地者、萬物之父母也、万物之

生、惟人得其秀、而靈具、四端、備

萬善、知覺、惻異、於物、而聖人又

得其最秀、而最靈者、孝經曰

天地之性、人為貴、孔安國傳、云、凡生

之化、之間、含氣之類、人最其貴者、

天地のうさく 宋陸子靜曰

い〜うゆ〜し〜るれ来

平宣時 ツホラチ 大佛法奥守く 東鑑云

治十五年自弘安十年至正安三年北条义邦时忠后改宣时系圖云时政時房甥也宣时執權水

恩寺友

西朝古今〜 時頼とよかん

あり

〜 吳孫あり

〜 ぶ〜る〜る

〜

〜

〜

〜

夜明寺入道鶴ヶ島の社系の次て

よリカ利た馬入道のり〜先け〜

つ〜き入道〜ありよあは

〜 一載より

つらひにちんよあひ〜

〜 帯

〇〇年（二）そごふわろ〜この人そと府
わらん〜りりて奉〜たはり三利
れそめ地つり〜り〜り〜り〜り〜り
と用意〜り〜り〜り〜り〜り〜り
地〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
対ん〜り〜り〜り〜り〜り〜り
ゆ〜り

秀忠

東鑑中一云後冷泉院八対中
藤島源朝臣杉義子初伐女初貞

任時有丹折之旨康平六年八月
潜勸請石清水建瑞難於當相
模國由比郷今号之永保元年二月
建隆奥守及家加於後治康四年
十月杉綱点小林心之北山梅宮
厩被迂之

足利大馬入道

東鑑四十四云建

長六年十一月足利大馬入乃正義
病惱已危急之間為治之相列令
向彼兼給二十一日入道正四位下行

相似昂一分身昂一究竟昂之理
昂ハ佛法ノ名字トシテ薄
地底下ノ凡夫ノ至高頭トシテ皆ハ
性具トシテ一名字昂ハ佛
法トシテ一觀行
昂ハ坐禪修行トシテ相似昂ハ
似美薩ハ行トシテ分身
ハ愛執トシテ究竟昂ハ妙覺位
如來地ハ佛トシテ一切の

物子の教よむるもて悉皆ハ性わ
と究竟ハ理昂ハ女トシテ悟了圓
未悟トシテも又ハ有無成
佛化什麼為迷倒之眾生トシテ
又欲ハ三欲ハ似たり 聖法總録百九

十九曰欲生則三尸生欲滅則三尸
滅故至人曰欲者不欲不欲者欲
之智怪貪ハ一皆欲源トシテ一紙半
後トシテも後生ハ一紙半
又ハ合結トシテ一紙半

極樂よせられて金むらう堂よあはく
百味は飲食とくくく大樂にせんよ
くく心あつゆへお今生よく布絶と
すうとくく欲よ似うり

瓶のくまらひつゝまのく堀川友とく金
くう移ははとと瓶よくうり仁和寺と
よう中きうり前とと成り下はゆり
瓶と花のくくくくくくくくくくく
かたゝととととととととととととと
とけくもくひはははははははははは

くは肺のあつゝくくくくくくくく
ゆへうりうりうり

堀川友 久我一門基具古改人信号

堀川基俊大綱言文

本寺ゆへへ 仁和寺とくくくくくく

くもくく今の仁和寺より山のくた
那あうり中寺の四柱くくゆへへや
今と本寺那とくくくくくくく
法儀くくは竜安もくく西のあつは
りう那とくく寺のくく傷とくくく

かりりとゆりこは純白小糸糸あがり
ゆりの葉のまはりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり
あがりあがりあがりあがりあがりあがり

あがりあがりあがりあがりあがりあがり

田原黄門 望次人

新秋 豊原氏衆人の望次人

比下く豊原氏らくご統秋くえん

豊原氏ヲ略して豊と云く

徳忠 早下人

荒涼 比下人

十二律 豊原氏

十二律 豊原氏

えんえんえんえんえんえんえんえん

後生とありき

湯治子平篇子曰

後生丁^レ畏^レ事^ヲ知^レ来^レ者^ノ之^レ不^レ知^レ今^ニ

也

系^ノ成

糸井氏八幡^ノの井と云

こころの心^ノととも^ニ笛吹坊下の

衆人

呂律^ノの物よりのつらさ

首楞嚴經

曰^ク譬如^シ琴瑟^ノ笙簧^ノ漢^ノ鼓^ノ篳^ノ篥^ノ有^レ妙

音^ノ若^シ无^レ妙^ノ指^ノ終^ニ不^レ能^レ發^ス汝^ノ與^レ衆

生亦復如是

かたしとあつていふ

あれとも天の音の響の如く

すべしといふんじは人の心

富寺の樂の國と云ふ

物れ秘のりていふ

かふりともいふ

時の國今たゆみと云ふ

ら時空の音乃^レ聲あり

細りもあつたり

ついでと云ふ人

二月

しり警まひまもてぬ中ら成持も
と秘苑のまありけしししとらそ
りしししとらそとらそとらそとら
す元浄の弟の英浄洞のついでこれ
常の洞子紙とんわののなきと
の常のついで西園寺のついで洞子
いらんついでついでついでついで
まもついでついでついでついで
らついでついでついでついでついで
ついでついでついでついでついで

天王寺 推古天皇の心守を徳太子

徳太子多内相國信長廣目八雲の
像を安置すりゆは天王寺と云
ひ

伶人 音楽すり若と云英帝の

時伶倫といふ樂人ありしとら
後世は伶人と云ふ

しと

六時堂

黄鐘調のついで 八月十日

此より 海頂

みればよてく月あけ成りそまきこ
今わたり秋のちありき

涅槃寺 二月十日

を具云 壬子日二月廿二日

りよの事しよとてのし 尚書云

八音克諧ハツオンキョウハツお楽倫

非常火調子 平島ゆきよりし 紙巻

きしやれこの事しゆりしきよ人の
牙わり

紙園精舎のまき院 大蔵一覽

中二云 佛大檀越復達多長者

達之云 紙陀大子ノ園と復達し

りえて達之故紙園といふ

西園寺 拾芥云衣笠ウシカサ云良古改大

長云經云教

浄金剛院 つまひのもの

東三四あり 拾芥云本名天

安寺待賢門院中達立し浄入字

と法とるすなかりし浄金剛院を説

成推昂あり

建治弘安の比は家の目大紋免入つて
物よきしやうり付の布又瑞くと
馬と付りて尾髪よきしと
てくも大井のたふふ干よつて
方乃きしひてしりしよつて
んふひゆしなも奥ありて
つらそくゆしむくう道志
まの今日もこりゆらりひ
ひまの半とまてふのや

せりそものねり地をわくひ
な若乃ゆんよもせし
ことたにもみつさくし
りしひり

建治弘安 省後宇多院元年号

まうり日 かなりり日

紋免 東鑑二十三建保六年六月

將軍家文朝任大將為孫次、赤鶴
置、高共、判官能範布衣冠草、
緒、細尻、鞘、太刀、帛、小、三人、雜色、四、

細谷懸一人故免四人

くもれ舟くたつらふ平よはせさてら

と

くもれ舟くたつらふ平よはせさてら

くもれ舟くたつらふ平よはせさてら

道志とて 嶽原下 捨那道使下

よ道志を 明決道 輩六位 時仕

馬の志昂 象使宣旨 元志若

年新使懸 諸公事之故 以而道

為る 撰此号 乃志し 明はる 公事

大使懸の志とあり 右のたきつもの

志とありと道志と云

つともの 象れ大対しとあり 地入は

地しとみ故免のはとものとおろ

えかり

已着 衣服車馬のくまり 皆い合よ

已ら候

竹谷新野東二を東院(泰)られり

くもれ舟くたつらふ平よはせさてら

くもれ舟くたつらふ平よはせさてら

預列^ス 妾^{ヒメ} 靜^{シズカ} 及^ヒ 母^{ハハ} 破^{ヤク} 存^{ゾン} 仲^{チウ} 自^{ヨリ} 京^{キョウ} 來^キ
干^{ツグ} 德^{トク} 倉^{クラ} 下^{シタ} 略^{リョク} 之^シ

ひまふた さやまふた

佛^{ブツ} 祿^{ロク} の^ノ 由^ユ 縁^{エン} 記^キ

白^{シラ} 物^{モノ} の^ノ 根^ネ 縁^{エン} 海^{ウミ} 平^{ヘイ} 盛^{セイ} 衰^{サイ} 紀^キ 十^{ジュウ} 七^{シチ} 云^{クニ}

やま白^{シラ} 物^{モノ} じしと^シ じまの^ノ あり^{アリ} 漢^{カン} 家^カ

し^シ の^ノ 虞^ヨ 氏^シ や^ヤ じ^ジ の^ノ 王^{オウ} 昭^{ショウ} 志^シ な^ナ し^シ

の^ノ 一^{イチ} の^ノ 皆^{ミナ} 是^シ 白^{シラ} 物^{モノ} 下^カ 一^{イチ} 我^ガ 物^{モノ} 下^カ

鳥^{トリ} 羽^ウ 流^{リウ} 巾^{キン} 宇^ウ 小^コ 橋^{ハシ} の^ノ 千^{セン} 歳^{サイ} 若^{ニホ} 前^{マヘ} と

て^テ 二^ニ 人^ニ の^ノ 遊^{ユウ} 女^メ 兼^{カン} り^リ り^リ り^リ 下^カ 略^{リョク} 之^シ

源^{ゲン} 光^{クワウ} 新^{シン} 汀^{テイ} の^ノ 寺^ジ 人^ニ 監^{カン} 内^{ナイ} 源^{ゲン} 氏^シ 物^{モノ} 流^{リウ}

小^コ 河^カ の^ノ 本^{ホン} と^ト 云^{クニ} の^ノ 人^ニ と^ト 起^キ

龜^{カメ} 菊^{キク} 東^{トウ} 鑑^{カン} 二^ニ 十^{ジュウ} 五^ゴ 兼^{カン} 久^ク 三^{サン} 年^{ネン} 丑^ウ

月^{ツキ} 武^ブ 家^カ 背^セ 天^{テン} 氣^キ 之^シ 起^キ 依^イ 舞^{マヒ} 女^メ 龜^{カメ}

菊^{キク} 申^シ 狀^{シヤウ} 下^カ 略^{リョク} 之^シ 龜^{カメ} 菊^{キク} と^ト 龜^{カメ} か^カ と^ト

しんがり

後^ゴ 鳥^{トリ} 羽^ウ 流^{リウ} の^ノ 心^{シン} 時^ジ 信^{シン} 流^{リウ} 存^{ゾン} 仲^{チウ} 以^{ヨリ} 長^{チヤウ} 樂^{ラク}

古^コ 大^{ダイ} 和^ワ の^ノ れ^レ ら^ラ ら^ラ と^ト ぎ^ギ れ^レ 樂^{ラク} 府^フ の^ノ 心^{シン} 傷^{キヤウ} 疾^{シツ}

乃^ノ 春^{チュウ} の^ノ ら^ラ ら^ラ の^ノ 七^{シチ} 流^{リウ} の^ノ 舞^{マヒ} と^ト も^モ ら^ラ 川^{カハ}

と^ト ぎ^ギ 今^{イマ} 今^{イマ} ら^ラ と^ト ぎ^ギ れ^レ の^ノ 又^{マタ} 德^{トク} の^ノ リ^リ 介^ケ 也^ヤ と^ト 吳^ウ 名^ナ

とほむらひ多れと
可もよとてん
尚一飛あつもの
とてふ後一
位法入道と授
乃平家也
くう音同
乃てよ
に九郎判官
たぬせり
浦

さうくう
りやうり
佛東國
わさく
平と今
位法前

藝古丸
こり又後漢書桓策曰今日取家
古之カ也

樂府 古樂府あり新樂府あり文撰

明よなせり一念念仏乃うま初く後
暖儀院乃心代りうまはうは
後もはるうま親房のうまはる

六时礼讃 晋の惠遠法師甚社と
すのて甚花漏ととらう六时と礼
せう六时念佛の権興とら唐の若
導六时礼讃偈とらうのあつて
日長乃勤りとら安樂、他あり
りう吳流なりとらと浄土教のう
安樂 法物乃中子く住道安ふとら

二人あり後鳥羽院六时別时念佛
とら六时礼讃と唱てらうとら
善観房とらとらとらとらとらとら
出家せうの後鳥羽院とらとらとら
うまて住道安樂と罪よとらとら
へ善徳し作と六条川原と安樂

と斬トラン 法名如願

と泰 廣隆寺く泰氏のうまとら
とらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとら
とらとらとらとらとらとらとら

尊、他、あ、く、を、は、き、う、り、り、る
親房、シヨキ、不、為、れ

千、年、の、劫、也、念、仏、の、文、水、の、さ、り、如、場、と
く、う、め、ら、さ、く、り

子、本、八、杖、也、念、佛

文、水、急、の、院、年、号

如、輪、と、人

く、り、さ、い、く、い、り、あ、り、た、り、の、と、付、く、と、と
妙、観、の、あ、り、さ、い、く、い、り、た、り、と

妙、観 元、年、杖、書、云、勝、尾、寺、海、堂、観、音

像、宝、龜、十、一、年、七、月、十、八、日、以、丘、妙
観、刻、之、十、臂、十、目、莊、嚴、端、嚴、又、加、
四、天、王、像、凡、五、尊、三、十、日、而、如、八、月
十、八、日、妙、観、合、掌、而、化、観、音、之、靈
應、也 仲、房、抄、列、勝、尾、寺、募、縁、疏、
と、妙、観、雕、像、の、と、と、り、り

み、ま、の、書、ふ、た、と、と、地、ろ、ろ、り、り、
ゆ、ま、あ、く、い、ん、り、い、あ、と、人、と、も、
と、そ、著、成、し、ら、り、り、ふ、み、と、成、り、
り、り、地、あ、り、り、り、り、り、り、り、り、

丁氏チノシ〜庖厨バウコ乃ノすゝとてチ宰サイ烹コウ
すゝゆへは庖丁と云く

多タりリのノ 備ビ豫ヨと云

百日ヒヤクニチ之ノ 羅ラ 百日ヒヤクニチ之ノ 羅ラ

ふフとト云ク

西セ園エン寺ジのノ 羅ラ

ふフとト云ク

西セ園エン寺ジのノ 羅ラ

一イチ条ジョウ相ソウ國コクと云ク

人ヒトのノ 地チと云ク 倫リン浩コウ堯コウ曰ク篇ヘン

積ツク之ノ 与ヨ人ニ也ニ 出デ納ナク之ノ 各オノオノ謂イフ之ヲ 有アル司シ

孟子孟子曰ク丁チ以テ与リ丁チ無ク以テ与リ傷キ惠ヱ

すゝて人ヒトのノ 考コウをシ能スるル人ヒトもモのノ あり

けり人ヒトれノ子コのノ 人ヒトと云クあハらハぬルぬル

うウ又マタのノ 考コウと云ク人ヒトと云ク地チのノ 史シ書ショ

乃ノ 文モンと云クたタらハらハぬルぬルぬル

しシもモ考コウ者シャのノ 考コウと云クしシと云クしシと云ク

と云クあハらハぬルぬル

又マタのノ 考コウと云ク史シ書ショはハ物モノ也ニ

ふフとト云クしシと云クしシと云クしシと云ク

Handwritten text in cursive script, likely a list or account, starting with a large initial 'S'.

Handwritten word or phrase, possibly 'S' or 'S'.

Handwritten word or phrase, possibly 'S' or 'S'.

Handwritten word or phrase, possibly 'S' or 'S'.

Handwritten word or phrase, possibly 'S' or 'S'.

Handwritten text in cursive script, likely a list or account, starting with a large initial 'S'.

Handwritten text in cursive script, likely a list or account, starting with a large initial 'S'.

る物なり又あはれんよの色こらるる
ゆゑは後日の新ありてうつろひん
よ色あはらうらうらうらうらうら
ま〜唐室よ〜物とくつ〜わ〜うら
後木念〜人〜あ〜ま〜の〜あり〜うら
と〜と〜と〜の〜な〜た〜わ〜あ〜ん〜あ〜あ〜ふ
わ〜あ〜も〜〜の〜物〜う〜ら〜し〜そ〜こ〜
乃もへ入あ〜う〜ら〜う〜

瓶うらうら

白氏文集才一函宅詩

巢鳴松桂枝瓶蔵蘭菊叢

こ〜女

山彦

木神

空谷響

樹神

和名才二云文選葦吹賦木魅

山鬼今案木魅昂樹神也 和名

古木方ころと地大乾リ云

又あはれんよ

赤秀曰の如明鏡室

六祖曰明鏡亦非臺 古徳云胡来

胡現 漢来 漢現

丹波の山とていふあり人とはとて

しそめ〜〜〜地〜うら〜この〜い〜

こらるる前かこらるる秋のちり聖海と

よきつりふり

大社 祓名帳よの多はとまおや

の国大社に日本記よの素盞島

れ子大己貴と宗といひの祓紙令よ

の素盞島らりとくろく又杵春明

祓と号るく

志と某く

聖海上人

しりらる

獅子コモイヌ狛犬

わのいさよはよのちもあひいそてりぬよ

いさぬ物くもあひもあひぬ

いそてりぬよはよのちもあひいそり

紙もいりよぬもあひいそり

ふそてりぬよはよのちもあひいそり

とと宗たよは友あひぬらぬ物あふ

小治の家り能よとんいりあひいそ

多てりぬよはよのちもあひいそり

よはすかきりり

柳ヤナギ宮ミヤの祝イハヒ經ツル冊ニシ或ナ鞠マド冠カザリ或ナ出デるルのノ対タイ

しつり候しあつし後き初虎大由
方し袖と袂し首大らしし
うらちんやし定ぬるよらうひ作らま
あつふ 秋の帯の帯入袂々たす
まぢよあしひく袖と入也らん
と作ししゆりらうゆ入ましとん
そらまもみいあうりてふ方とえ
たも返れあ知らうしあつらりし
らししあしあれゆらりあ
お國伊直との物あしとらし

りたも同よとんあて日候わらねらう

あふ

治 事あ治し治しつあまひてあまよ
てあらうあまのまよし

百重山流文 甲入心あつらんし

うこいああし

かり門人刑言 甲信云し後龍駒まま

れあのをましくたひ大庶流堀川と号す

悪笠之奈来く 傷風湯貨篇

古今七衣棟梁うあし定あつ自候の末考し

行房 世尊寺行成より十代

孫也 經尹 此書の行平代末

いゝゝ 模範

收録 行の言 庚韻カウシも 陽韻マウも

いゝゝ 唐韻とて 行方 依 陽韻

とて 行列 依 収録とて 行

德行 依 家とて 行方 収録

依とて 庚韻より 陽韻され

いゝゝ 行方 依

人あゝいゝののて 塔明礼れり

一は 橋川の常行堂より 龍花院と

弟より 承和より 依 行成の

いゝゝ 行成の 依 承和と 申傳

いゝゝ 書多し 依 承和と 申傳

いゝゝ 承和の 依 承和と 申傳

いゝゝ 承和の 依 承和と 申傳

いゝゝ 承和の 依 承和と 申傳

いゝゝ 承和の 依 承和と 申傳

承和の 依 承和と 申傳

正化 中よ及能化といふ才子よ及

正化といふ

賞物信正よ友よのそかお香あよと人得
し小陣の外よ信物んんん信物
しよなしよらあさよらよは
あらち名あちししあちしし
よらししししししししししし
ししししししししししししし
ししししししししししししし

賞物信正 能物よと家流し日那家

よん

お香あま 正月八日りり十めり人物

よそししししししししししししし
よらあらちわあちりかしの佛入と巻
かりり持しはけおのこ業く彼三巻
よひ業よおらるとわねと云

二月十日のちりあしらあまてお
ろてししししししししししししし
しししししししししししししし
お信あらあまのちししししししし

素高

東方七星角亢區房心箕

北方七星斗牛女虛危室壁西方

七星奎婁胃昂畢箕參南方七

星井鬼柳星張翼軫正月一日

月十二日始りよめて廿八宿と一星

つ毎日あててくも白く宿とを

代りてくもあつ曆よへ廿八宿

と次第して日教は配と日本ふ吉

備ふお侍ありとて別よきな

つりよきと中比大の回極とる日半

宿なりとて牛と漆のて廿七宿

とせり今つんく今と及八月十二

月十三素高よあつりてに兼好

牛宿ヲ除くは宿と月ひよ

からく八月一角二元三區四房

五心六尾七箕八斗九女十虛十一危

十二室十三壁十四奎十五婁く九

月一區二房三心四尾五箕六斗七

廿八虛九危十室十一壁十二奎十

三婁く素高清明未考之

Handwritten musical notation on the left page, consisting of a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. The notation is written in a cursive, handwritten style, featuring various note values, rests, and bar lines. The music appears to be a single melodic line.

Handwritten musical notation on the right page, consisting of a single staff with a treble clef and a key signature of one flat. The notation is written in a cursive, handwritten style, featuring various note values, rests, and bar lines. The music appears to be a single melodic line, continuing from the left page.

しつてはひびくはるるまゝに
らひていふいふはるるまゝに
形とあつて後いふはるるまゝに
んとせははるるまゝに
よらひていふいふはるるまゝに
想あつていふいふはるるまゝに
とらひていふいふはるるまゝに
百とせははるるまゝに
あつていふいふはるるまゝに

日月の満ちるるまゝに 易の卦

日月盈則食 虧名曰月 朔也 満
則缺 望 月満之名也 日月運
おらひていふ

如幻の生 金剛經云 如夢 幻 泡 影
妄想 五業 禪 師 曰 莫 妄 想 也
夏 中 間 各 一 湯 也 也 あり

教下 禪 宗 教 下 若 一 付 あり
あつていふ

あつていふはるるまゝに 果とせははるるまゝに
あつていふはるるまゝに 果とせははるるまゝに

又言、しりやうりくんとしりやうり
くんとしりやうりくんとしりやうり
えあふくんとしりやうりくんとしりやうり
て身一也

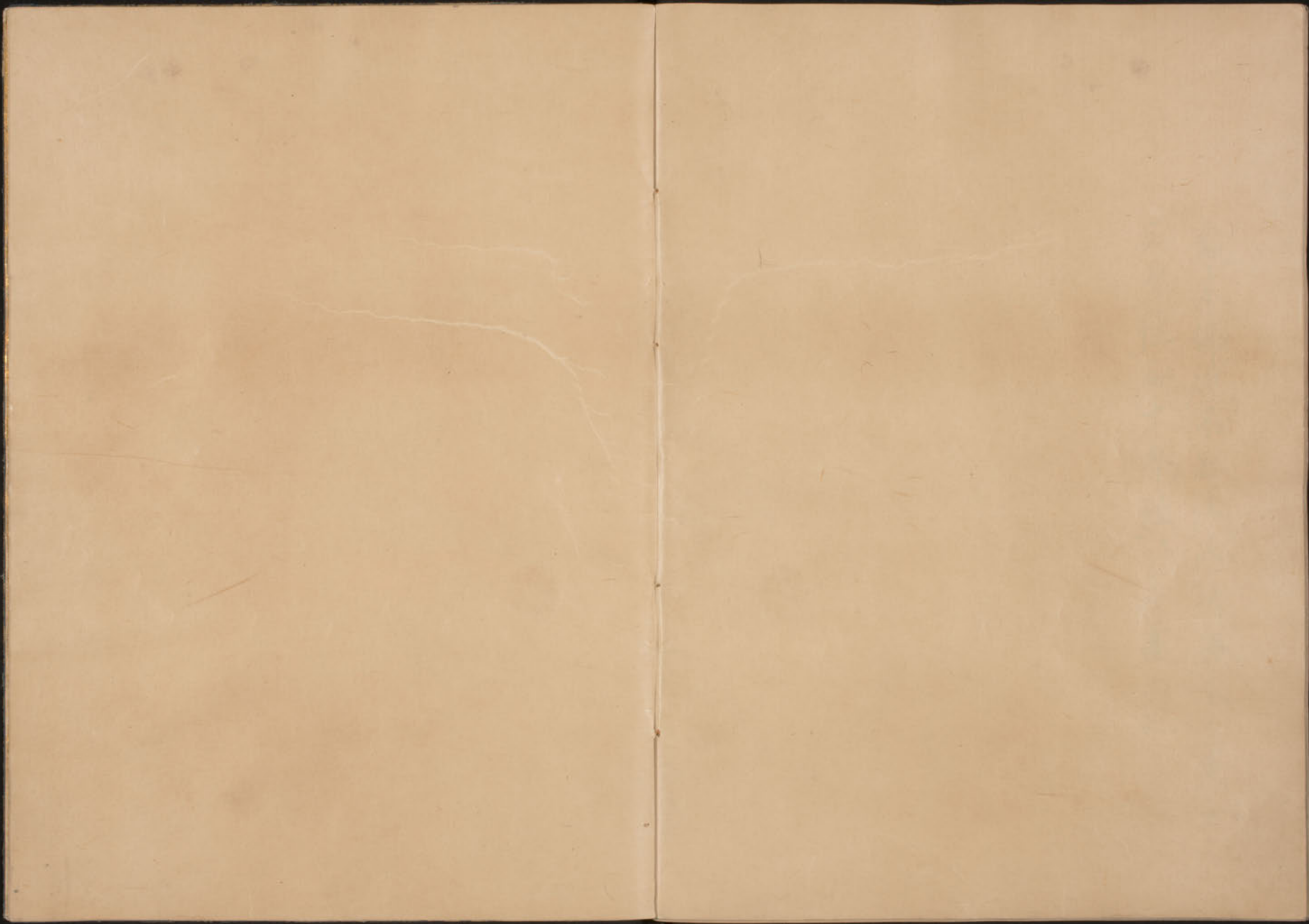
佛説三身壽量無色經曰、文殊白、
佛言、我等從昔聞如來説法、如來何、
仏也、此説法、佛告文殊言、四十一
重内大院兼大毘盧遮那、説法、文殊
重白佛言、四十一重内大院何者、是耶、
也、言後言、也、十住十行十迴向十地等

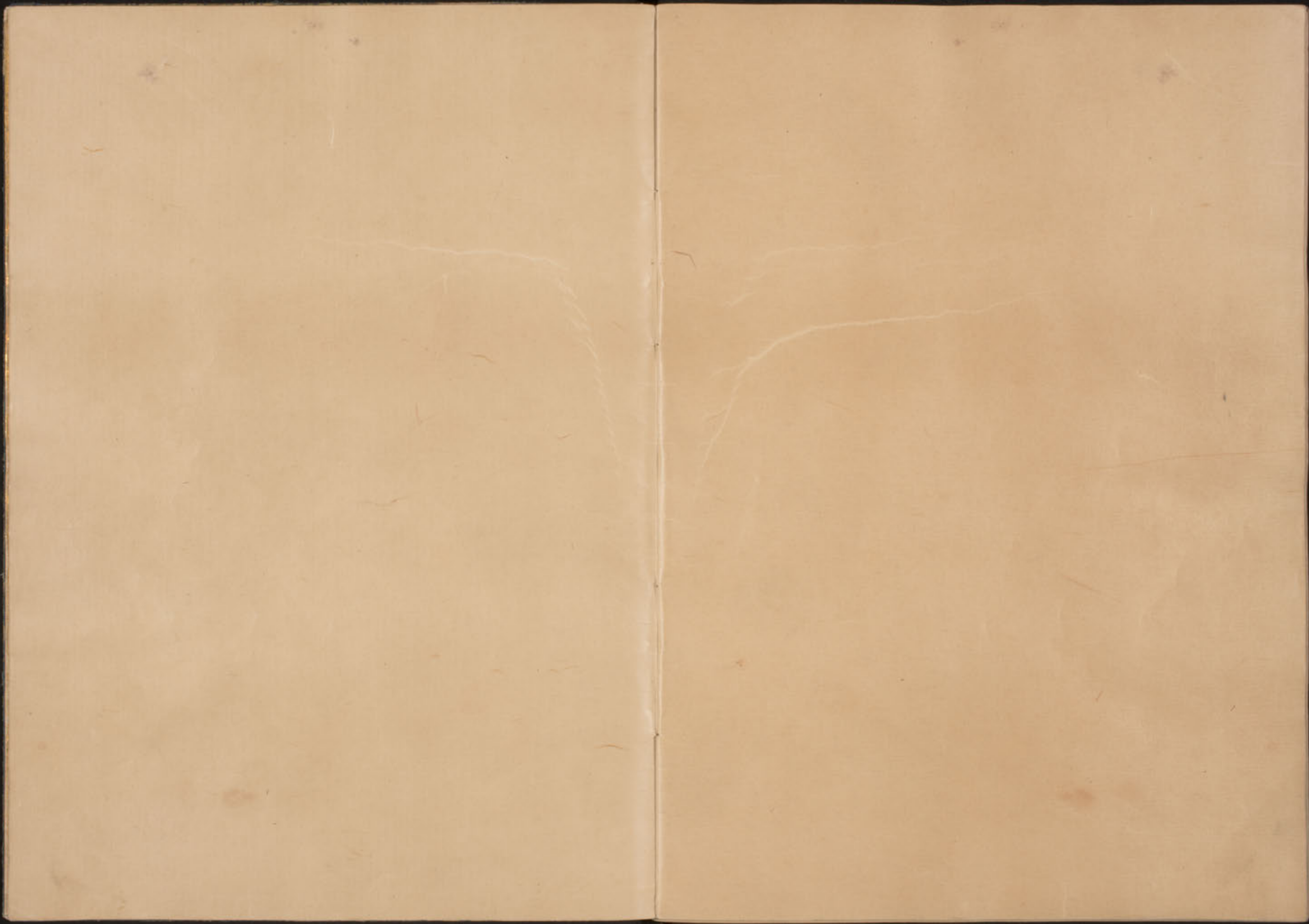
覺内大院兼妙覺地、大毘盧遮那、
説法、文殊重白佛言、妙覺地毘盧
遮那、從何佛兼説法、也、言後言、妙
覺地毘盧遮那、兼無始之終、一心一念、
本佛説法、文殊重白佛言、無始之終、
一心一念、本佛兼何佛、説法、也、言後言、
無始之終、一心一念、本佛兼無心之念、本
佛、説法、文殊重白佛言、無心之念、本佛
兼何佛、説法、也、言後言、無心之念、本佛
上、更無佛、陀之、前佛、無後佛、之心、無

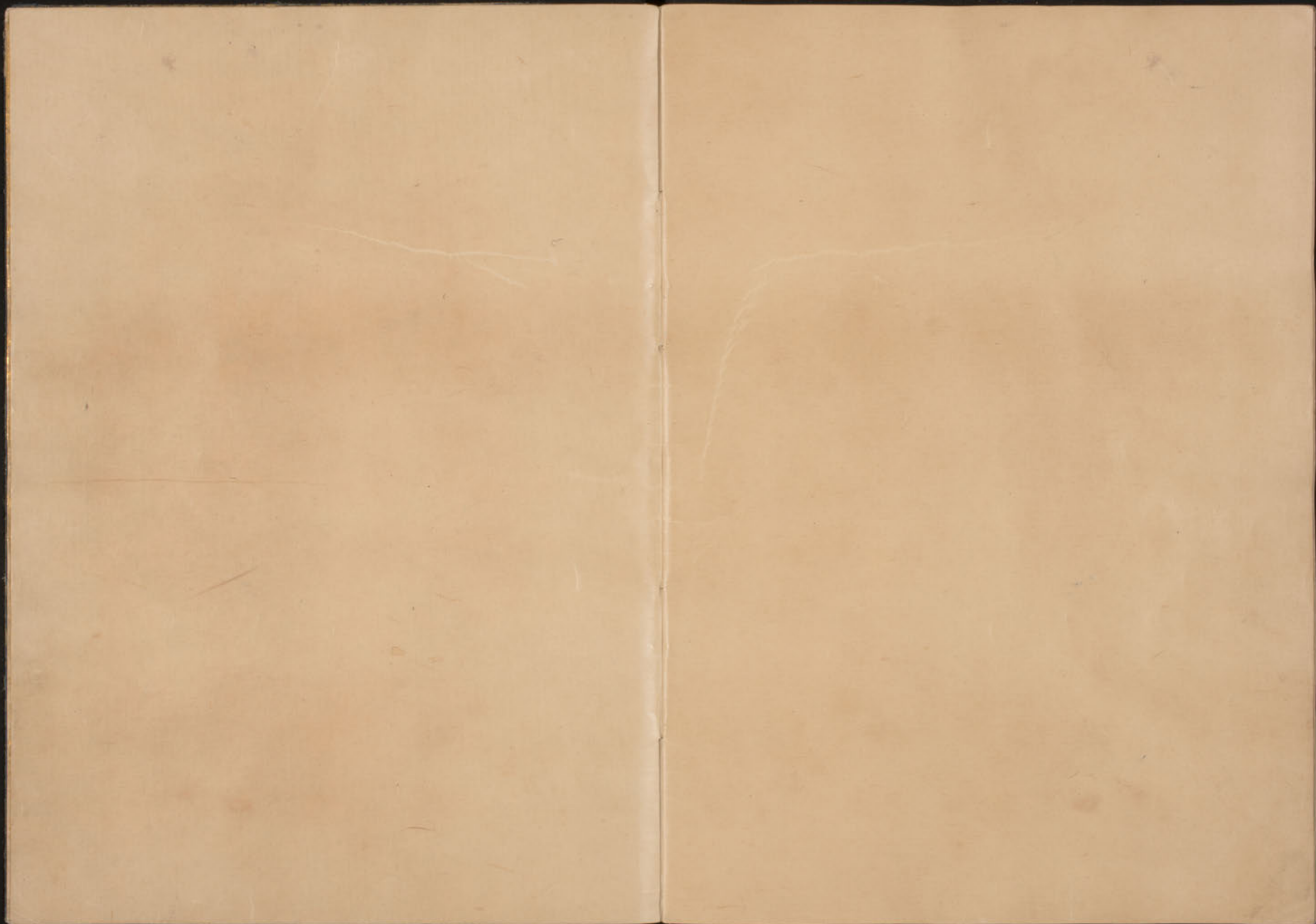
念本佛以不思议为体无本去来
三身性十界性今画不记

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]









62
10
4

1
10
4



110X
516
4